福岡市埋蔵文化財調査報告書　第995集

博多125

－博多遺跡群 第168次調査－

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、やむをえず破壊される遺跡については発掘調査を行なって、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成18年度に行ないました、博多168次調査の成果について報告するものです。本書が皆様の地域の歴史に対する御理解の一助となり、また歴史学、考古学上の研究資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担など多大な御協力を戴きました、双日株式会社をはじめとする関係各位に深く御礼申し上げます。

平成20年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田 裕嗣

ー例　言ー

・本書は福岡市教育委員会が2006年12月１日から2007年１月23日にかけて行なった博多遺跡群第168次調査（博多区中呉服町126）の報告である。調査は蔵冨士寛が担当した。
・本書の編集、執筆は蔵冨士が行ない、遺物の実測、図版のトレースについては米倉法子の手を煩わせた。
・本書における方位は座標北であり、遺構についてはSK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）等の略号を使用している。
・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目　次

Ⅰ．はじめに…… 1
　１．調査に至る経緯…… 1
　２．調査の組織…… 1
Ⅱ．調査の経過…… 2
　１．位置と環境…… 2
　２．調査の方法・概要…… 4
Ⅲ．調査の記録…… 7
　１．第３段階の遺構・遺物…… 7
　２．第２段階の遺構・遺物…… 14
　３．第１段階の遺構・遺物…… 20
Ⅳ．まとめ…… 22

挿　図　目　次

図１　博多遺跡群（1/25,000）…… 2
図２　調査区の位置（1/400）…… 3
図３　調査位置（1/200）…… 4
図４　調査区土層（1/60）…… 4
図５　遺構配置1（1/80）…… 5
図６　遺構配置2（1/80）…… 6
図７　SK003・013（1/40）…… 7
図８　SK003出土遺物1（1/3）…… 8
図９　SK003出土遺物2（1/3）…… 9
図10　SK003出土遺物3（1/3）…… 10
図11　SK003出土遺物4（1/4）…… 11
図12　SK013出土遺物1（1/3）…… 12
図13　SK013出土遺物2（1/3）…… 13
図14　SK038出土遺物（1/3）…… 14
図15　各SD（1/150）…… 14
図16　SD土層（1/60）…… 15
図17　SD出土遺物1（1/3）…… 16
図18　SD出土遺物2（1/3）…… 17
図19　SD出土遺物3（1/3）…… 18
図20　SD073・075・076出土遺物（1/3）… 18
図21　SK100出土遺物（1/3）…… 19
図22　SK047（1/40、1/3）…… 20
図23　SK063（1/30、1/3）…… 21
図24　第3面出土遺物（1/3）…… 22

図　版　目　次

図版１　上　第１面（南西から）
　　中　第１面（西から）
　　下　第１面（東から）
図版２　上　第２面（南西から）
　　中　第２面（西から）
　　下　第２面（東から）
図版３　上　SD（南西から）
　　中　SD（西から）
　　下　SK047（西から）
図版４　上　第３面（南西から）
　　中　SK063土層（南東から）
　　下　SK063（南西から）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成18年５月15日、株式会社アスカエンタープライズより、博多区中呉服町126における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財課に対し、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地（博多遺跡群）内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査を行ない、現地表下180cmで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、双日株式会社と埋蔵文化財、双方の協議の結果、建築による遺跡への影響は避けられないということになり、発掘調査による記録保存で、対応することとした。

調査の開始は平成18年12月１日。平成19年１月23日にすべての作業を終了した。調査にあたって、双日株式会社をはじめとする関係各位には、多大な御協力をいただいた。記して感謝したい。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　双日株式会社
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　平成18年度　埋蔵文化財第１課　課　　長　山口譲治
　　調査係長　山崎龍雄
　　平成19年度　埋蔵文化財第１課　課　　長　山口譲治
　　調査係長　米倉秀紀
調査庶務　平成18年度　文化財管理課　鈴木由喜
　　平成19年度　文化財管理課　鈴木由喜
調査担当　蔵冨士寛
調査作業　安東　昌信　草場　恵子　許斐　拓生　酒井　康恵　渋谷　一明　芹沢　淳子
　　為房　紋子　徳山　孝恵　中村　恵子　西村寿美枝　福島　　大　増田ゆかり

遺　跡　名	博多遺跡群　第168次				
遺跡調査番号	0656		遺　跡　略　号	HKT－168	
地　　番	博多区中呉服町126		分布地図番号	48　千代博多	
開　発　面　積	389㎡	調査対象面積	172㎡	調査面積	189㎡
調　査　期　間	2006.12.1～2007.1.23				

Ⅱ．調査の経過

1．位置と環境

博多遺跡群は古代末～中世を中心とし、弥生時代から近世に至るまで続いた複合遺跡であり、福岡平野を流れる那珂川・御笠川に挟まれた砂丘上に存在する（図1）。この砂丘は東西に長い3列の砂丘によって形成されており、通常は内陸側の2列を「博多濱」、海側の1列を「息濱」と呼んでいる。今回の調査地点は「息濱」の内陸側端部にあたり、南西側ではこれまで第98次、第100次、第150次の各調査が行なわれている（図2）。

第98次調査では計4面の調査が行われ、12世紀後半～13世紀前半を中心とする、12世紀～14世紀にいたる遺構が検出されている（大庭編1998）。第100次調査では計3面の調査が行なわれ、12世紀後半～近世までの遺構が確認されている（大庭編2002）。注目すべきはこの調査で検出された大形の溝（SD001）であり、これについては後で述べる。第150次調査では計3面の調査を行なっており、12世紀～近世に至る遺構を確認している（蔵冨士編2006）。第3面では12世紀を中心とする遺構が存在しており、この調査においても2本の大形溝（SD050・SD051）を検出している。

第100次、第150次で発見された大溝は、共によく似た規模を持つもので、不明な点も多いが、12世紀後半に位置付けることができるものだろう。ただ第100次調査検出の溝は北東－南西方向、第150次調査検出の溝は北西－南東方向と、走る方向は直交する関係にある。今回の調査（第168次調査）においても同様の溝が数条発見されており、これら溝との関連が注目される。

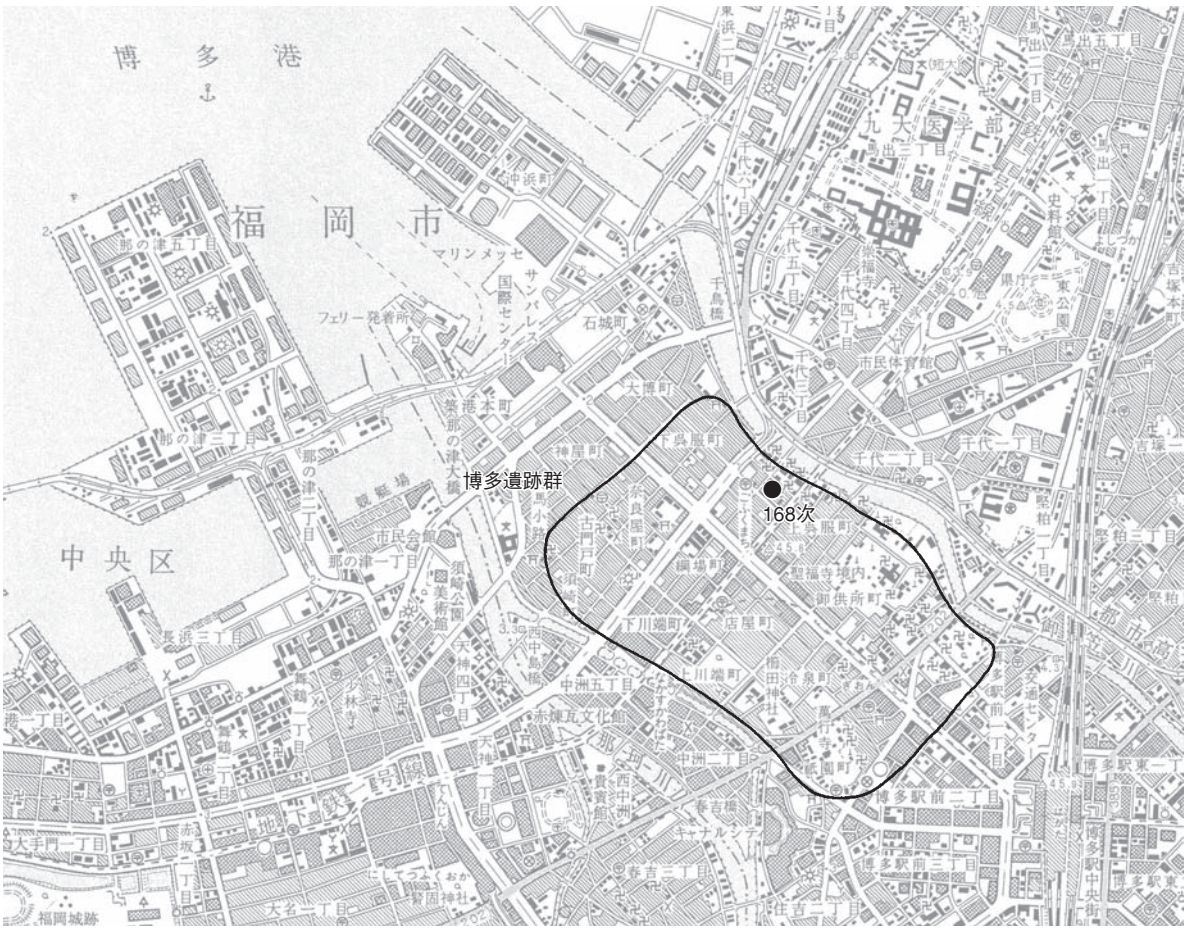


図1　博多遺跡群（1/25,000）

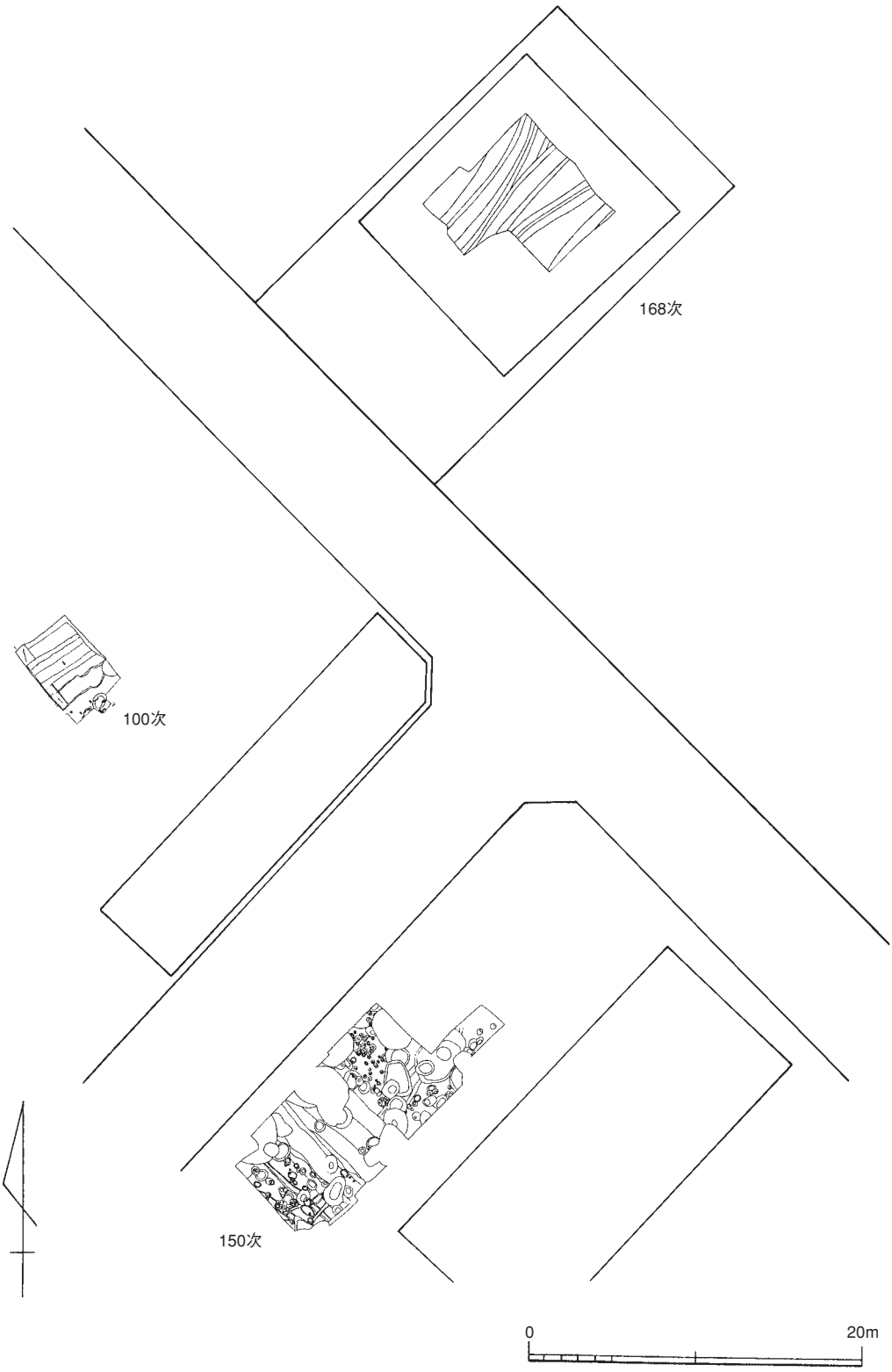


図2　調査区の位置（1/400）

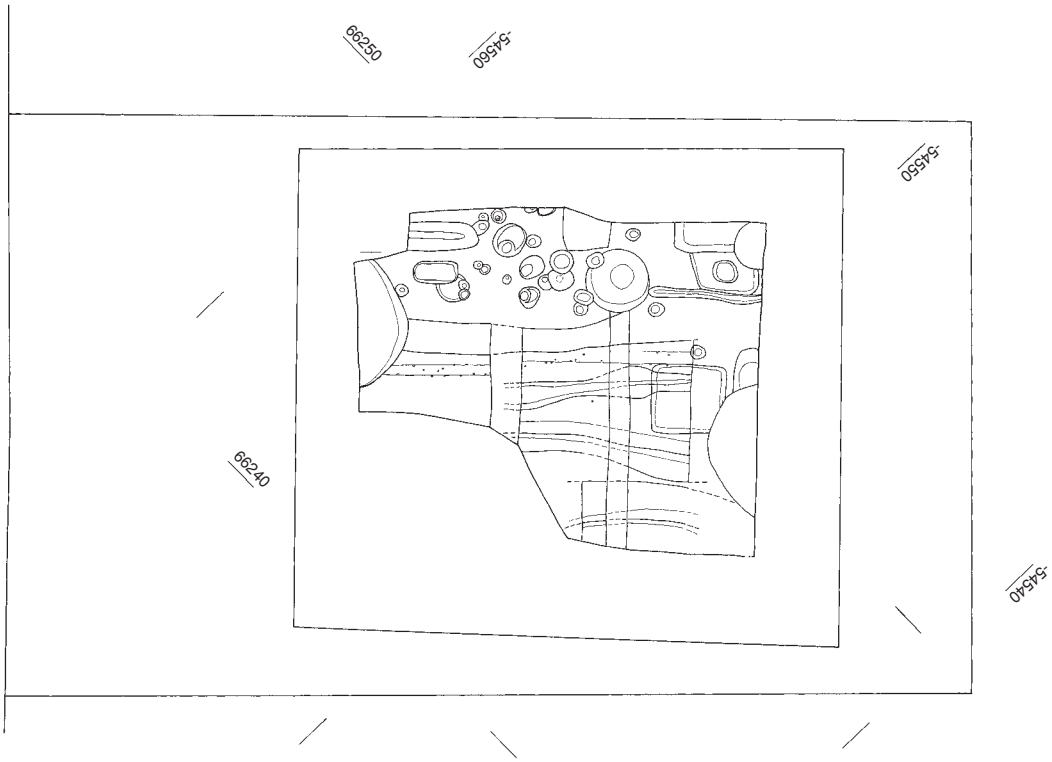


図3　調査位置（1/400）

文献

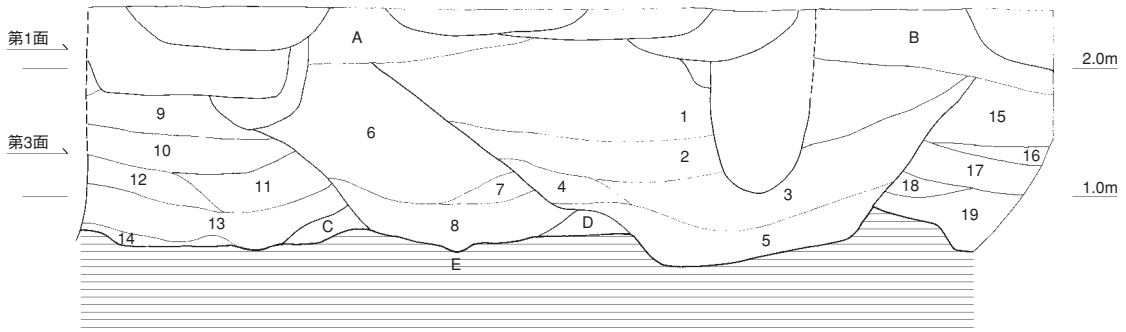
大庭泰時編1998『博多64』―博多遺跡群第98次調査の概要―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集　福岡市教育委員会

大庭泰時編2002『博多81』―博多遺跡群第100次調査の概要―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第707集　福岡市教育委員会

蔵冨士寛編2006『博多108』―博多遺跡群第150次調査報告―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第894集　福岡市教育委員会

2. 調査の方法・概要

調査はまず、現表土下1.5m前後まで表土の鋤き取りを行ない、標高2m前後の暗褐色砂質土上を調査面（第1面）として、調査を開始した。土砂の反転は行なわず、調査区の一隅を排土置場とし、状況をみて排土の搬出を行なっている。調査は合計3面、標高1m前後の白砂層に至るまでの調査を行なっているが、掘り下げはすべて人力によるものである。



A 暗褐色（焼土粒含む）　B 褐色（やや砂質）　C 灰褐色（砂質土）　D 黒褐色（シルト質）
1 暗褐色　2 褐色　3 灰褐色（砂質）　4 褐色　5 暗褐色（均一）　6 褐色　7 黒褐色（シルト質。有機質多く含む）　8 褐色　9 褐色（砂質）　10褐色（砂質）
11 黒褐色（シルト質）　12 黄褐色　13 褐色　14 暗褐色　15 灰褐色　16 褐色砂　17 黒褐色シルト

図4　調査区土層（1/60）

調査では、第1面を標高2m前後、第2面を標高1.5m前後、第3面を標高1m前後に設定しており、検出遺構は図5の通り。これら各面の遺構は各面調査時に検出したものという程度の意味しかなさず、あくまでも相対的な時期差を示しているに過ぎない。調査当初、調査区南東側における遺構の状況が理解できず、難儀していたが、第3面調査および土層観察の結果、調査区南東側は数条の大形溝が切り合っている状況が確認できた（図4・5）。

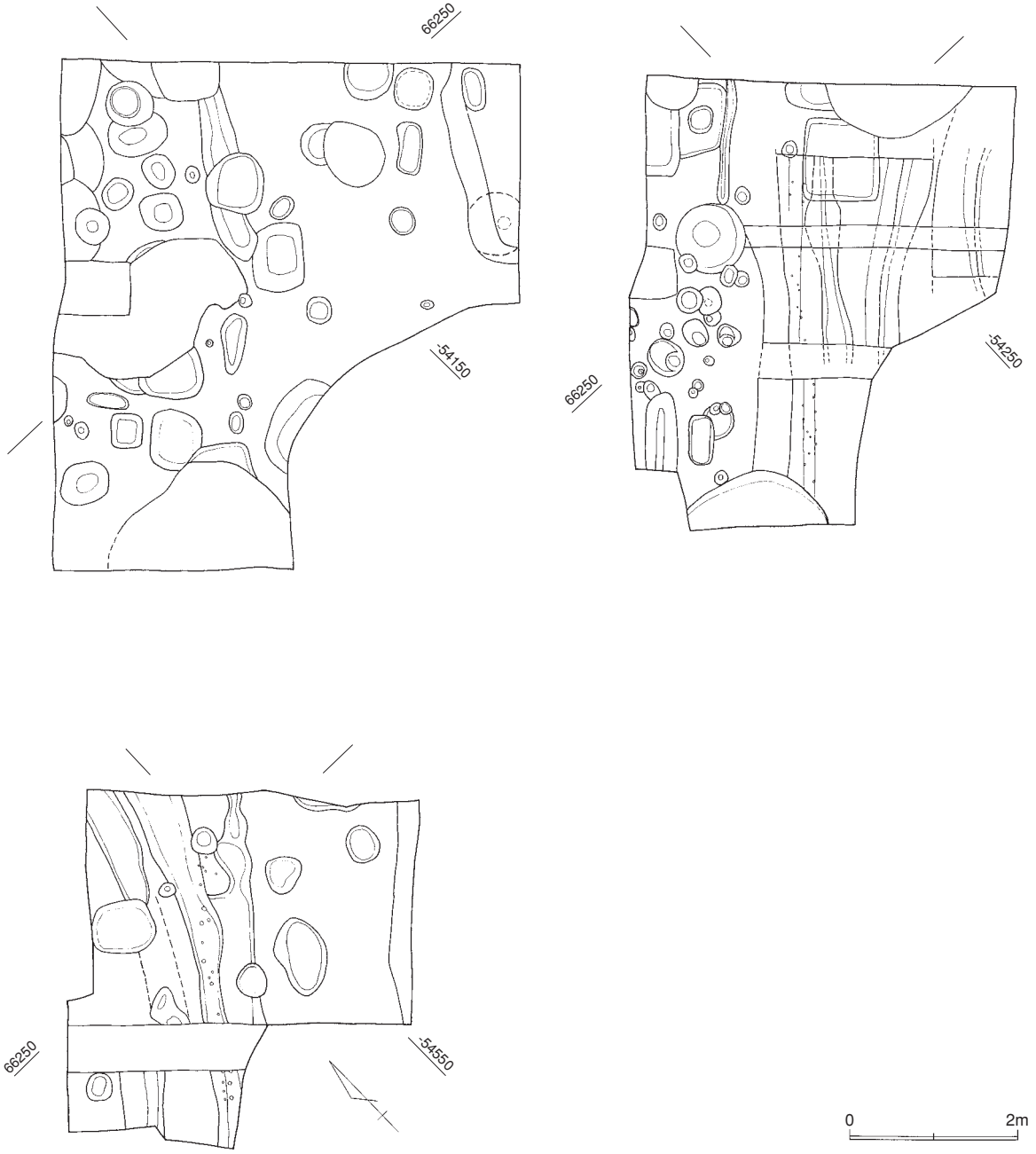


図5　遺構配置1（1/80）

調査区南東側において検出した溝（SD073～077）は、激しく切り合いながら調査区の2/3を占めていたようだ。途中で切りこむ遺構、および整地面も見当たらないことから、これら溝は一定期間継続して営まれていたのだろう。この事実から、後日改めて各面で検出した遺構を検討してみれば､遺構の中にはこれら溝の掘り方を誤認してものと考えざるを得ないものがいくつか認められる。

今次調査の各遺構は若干の整理が必要であり、ここでは調査区の大半を占め、一定期間連続して営まれた溝群を基準として考えることが適切であろう。ここでは今次調査の検出遺構を、第3段階（溝群の廃絶以降）、第2段階（溝群の存続時期）、第1段階（溝群の出現以前）に区別し、以下に記述を進めることにしたい（図6）。

第1段階は溝群出現以前に存在した遺構で、溝群の掘削により多くが失われており、調査区の西側でわずかに認められるに過ぎない。これら遺構は第2面調査時に検出しており、標高1.5m前後の褐色砂質土上に認められる。遺構はピットを中心とし、12世紀の後半から13世紀に位置付けることができるだろうか。

第2段階は、溝群が営まれた時期である。溝群の全体像を認識できたのは、第2面調査時および掘り下げ中のことである。SK100など、第3面で検出した遺構の多くはこの溝の痕跡である。各溝の上部は溝の区別なく掘り下げてしまっているため、各溝の規模については良く分からない。しかし、調査区内の土層断面をみれば、少なくとも溝のいくつかは幅4mを超えるものと考えられ、かなり大形のものであったのだろう。溝群の継続時期は良く分からないが、出土遺物をみる限り、13世紀から15・16世紀までとかなりの長期間にわたって営まれていたようだ。

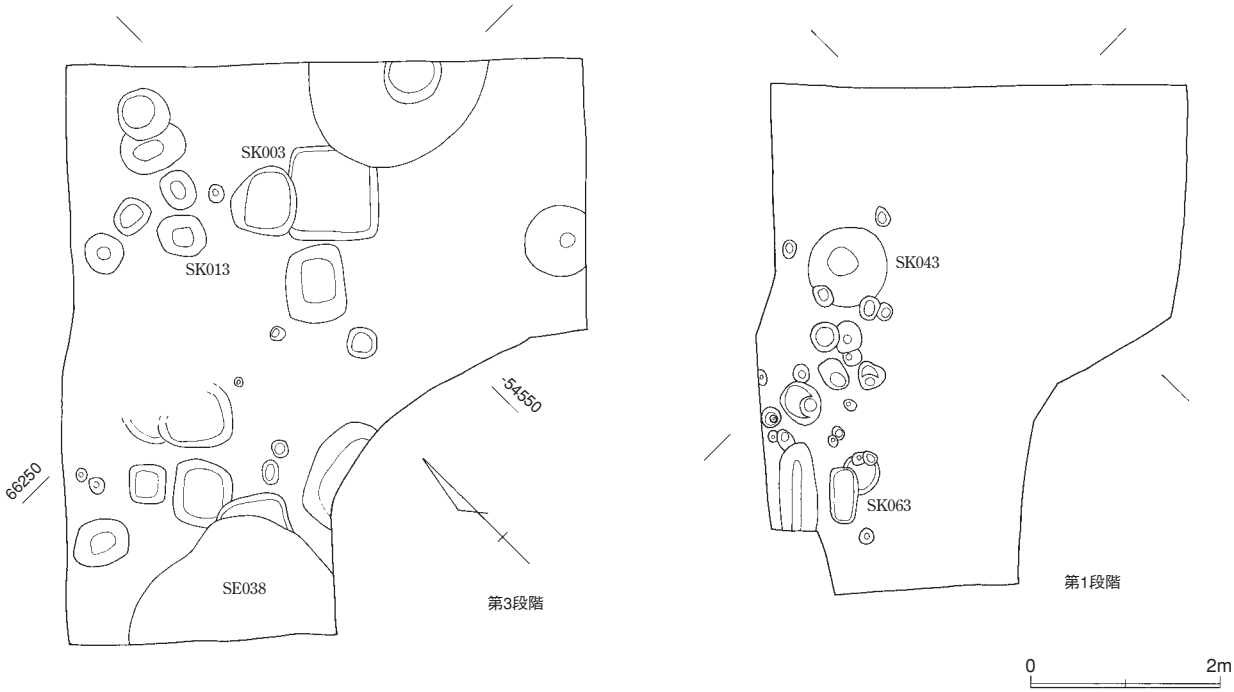


図6　遺構配置2（1/80）

第3段階は溝群が埋まり、調査区全体に遺構が営まれる時期である。溝の廃絶以降、整地が行なわれた形跡もあり（図4－A・B層）、溝の廃絶と第3段階における遺構の形成は若干の時間的空白が存在するのかもしれない。第3段階は第1面を中心として確認された遺構群が存在する時期であり、掘り込みは土層をみる限り、標高2.5m以上の地点で行なわれているようだ。井戸、土坑、ピット等があり、出土遺物をみれば、近世以降に位置付けることができるだろう。

以下では1～3の各段階における遺構、及び出土遺物について述べることにしたい。

Ⅲ．調査の記録

1．第3段階の遺構・遺物

先にも述べた通り、第3段階の遺構は第1面において検出した遺構が主体をなしており、井戸、土坑、ピットなど、種類も多い。遺構は調査区全体に存在しており、分布にはやや北－西側に偏りが認められるが、これは溝群埋土の中に営まれた遺構のいくつかを見落とした結果であるかもしれない。以下に主要遺構および出土遺物について、その概要を述べる。

SK003（図7）

調査区中央やや北よりに存在する遺構で、平面は径1.3mほどの不整円形を呈する。ただ一部掘り方および底面の一辺が直線的な部分もあり、本来方形の掘り方であった可能性もある。遺構の深さは0.5mほど。

出土遺物

瓦質・土師質土器を中心とした多くの遺物が出土している。図8は鉢である。粗・密の差はあるが、いずれも内面にハケ目の痕跡が残る。体部が直線的なもの（2・8）と、わずかに内湾するもの（1・6）があるが、それほど大きな違いではない。その他、細部においては、端部周辺がわずかに肥厚するもの（2・5・7）、口縁端部の外側が段をなすもの（1～4・7）といった特徴を有する個体がある。6は口径（復元）30.8cm、7は口径（復元）29.6cm、8は口径（復元）26.8cmをそれぞれ測る。図9－1～5・7は深鉢である。口縁部が短く直立するもの（1～5）と無頸のもの（6）がある。1・3・4は口縁部が肥厚するもので、1は肩部に花弁状のスタンプ文を施す。3・4は体部が丸みを持っており、内・外器面にハケ目調整を施す。3は口径（復元）24.6cm、4は口径（復元）31.6cmをそれぞれ測る。

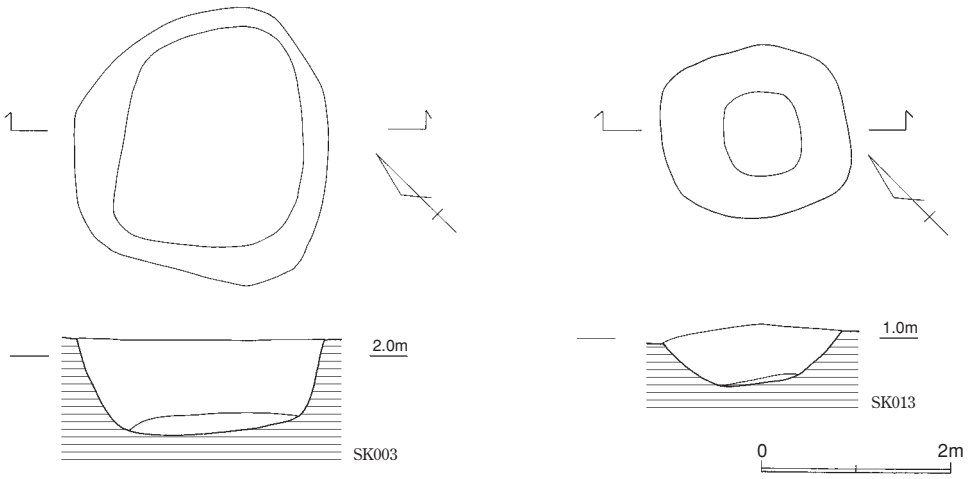


図7　SK003・013（1/40）

2は口縁がわずかに外側へ張り出すもので、端部は平坦に仕上げられている。口径（復元）17.2cmを測る。5は頚部がしまり壷状を呈するもので、口縁部はわずかに外側へ広がりをみせる。肩部には波状文を施す。口径（復元）13.8cmを測る。7は体部が丸みを帯び、無頚のものである。口縁端部付近には突帯を巡らす。口径（復元）17.2cmを測る。

図8　SK003出土遺物1（1/3）

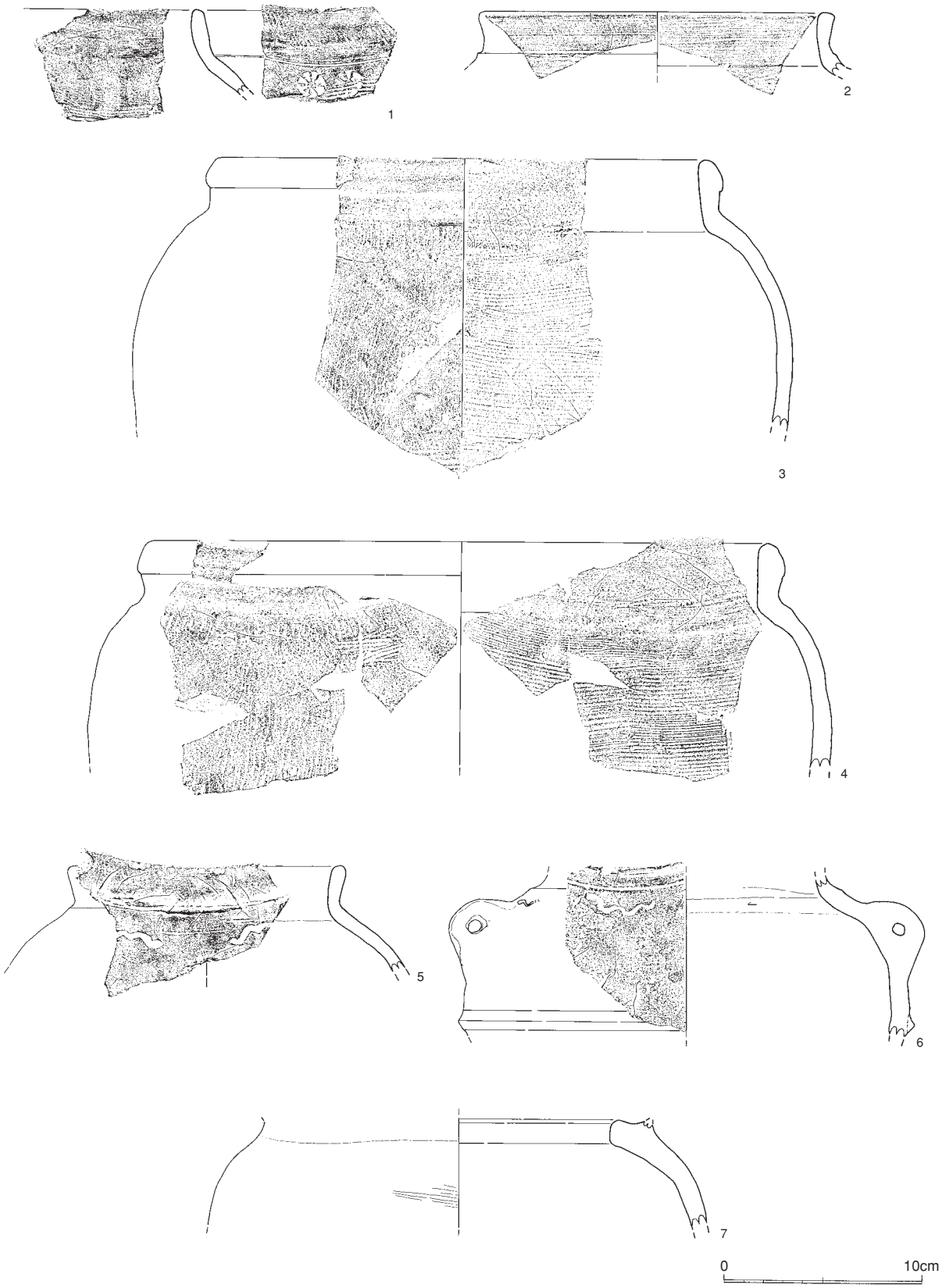


図9　SK003出土遺物2（1/3）

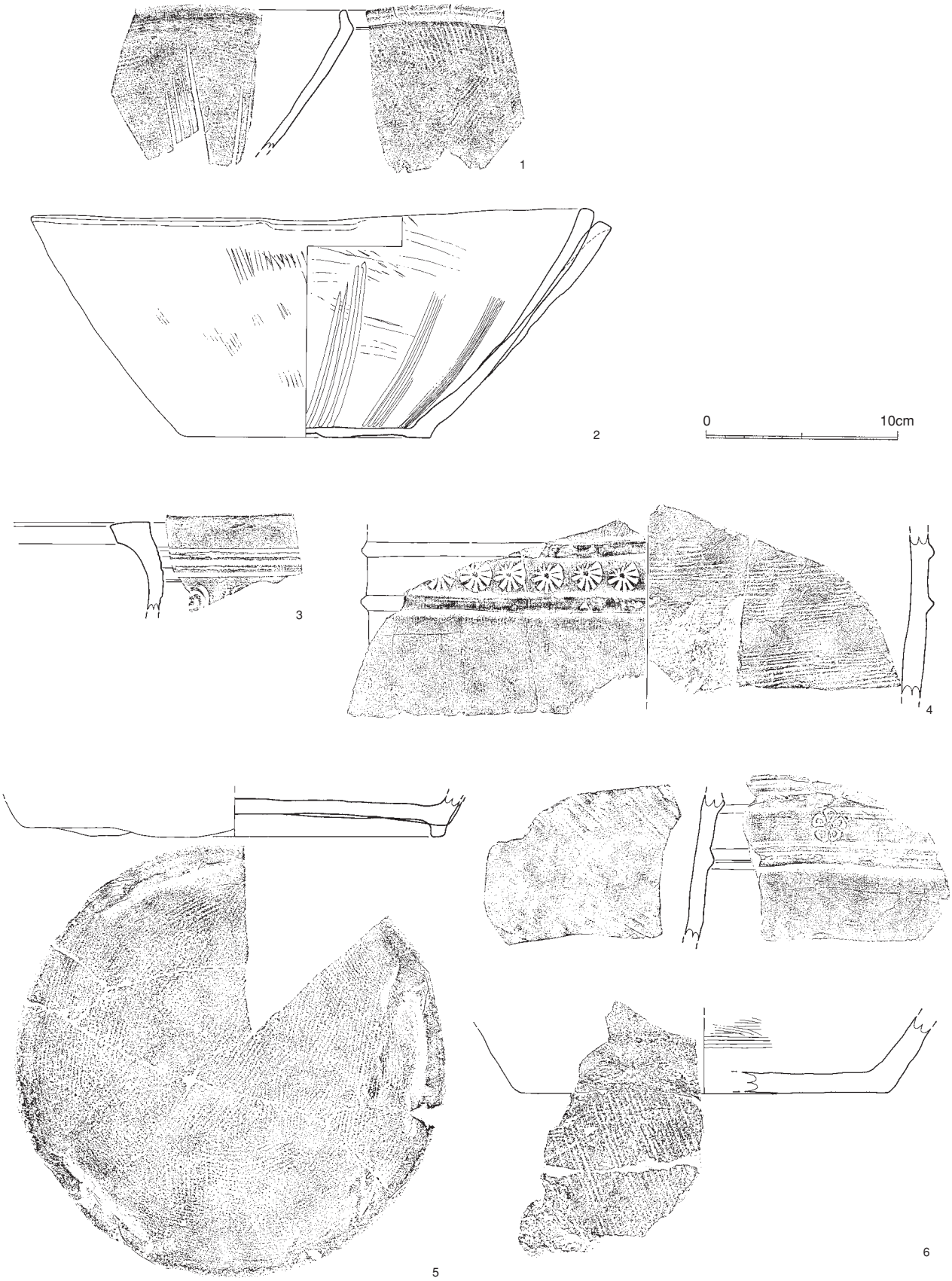


図10　SK003出土遺物3（1/3）

図11　SK003出土遺物4（1/4）

図9－6は釜である。体部は丸みを帯び、鍔は短く、断面三角形を呈する。肩部には波状文が認められる。図10－1・2は擂鉢である。1は口縁端部が屈曲し、短く上方へ立ち上がる。内・外器面にはハケ目調整を施し、すり目は4本単位。2は口縁付近がわずかに厚みを増すもので、外器面には一部にハケ目の痕跡が残る。内面のすり目は4本単位。図10－3は浅鉢口縁部片。口縁部は内側へ屈曲し、体部は丸みを帯びる。外器面には3条の沈線、その下にはスタンプ文を施す。図10－4～7は火鉢である。いずれも胴部片で2条の突帯間に花弁文状のスタンプを施す。6・7は底部片。6は底部の3箇所に短い足を付すもの、7は平底のものである。いずれも底面にハケ目調整を施す。その他、多くの瓦片も出土している（図11）。

SK013（図7）

調査区中央の北よりに位置する。平面は径1m程の円形を呈しており、深さは30cm程。壁面の立ち上がりはなだらかである。

出土遺物（図12・13）

図12－1～3は白磁である。1は椀口縁部片で、端部は大きく外反する2・3は皿で、2は口縁端部が外側へ広がり、底面には短い高台を付している。3は底部片で、短く細い高台を有している。4は浅鉢で体部は「く」の字に屈曲する。口径（復元）23.8cmを測る。5・6は釜である。5は胴部片で、鍔は大きく突出する。内外面には荒いハケ目調整を施す。6は胴部片。把手を有し、把手の隣りにはスタンプ文を施している。

図13－1・2は深鉢である。1は口縁部がわずかに肥厚する。内外面にはハケ目調整を施す。口径（復元）28.6cmを測る。2は底部片である。平底で、内外面にはハケ目調整を施す。底径17.0cmを測る。3は擂鉢である。内底面および側面にすり目を有する。

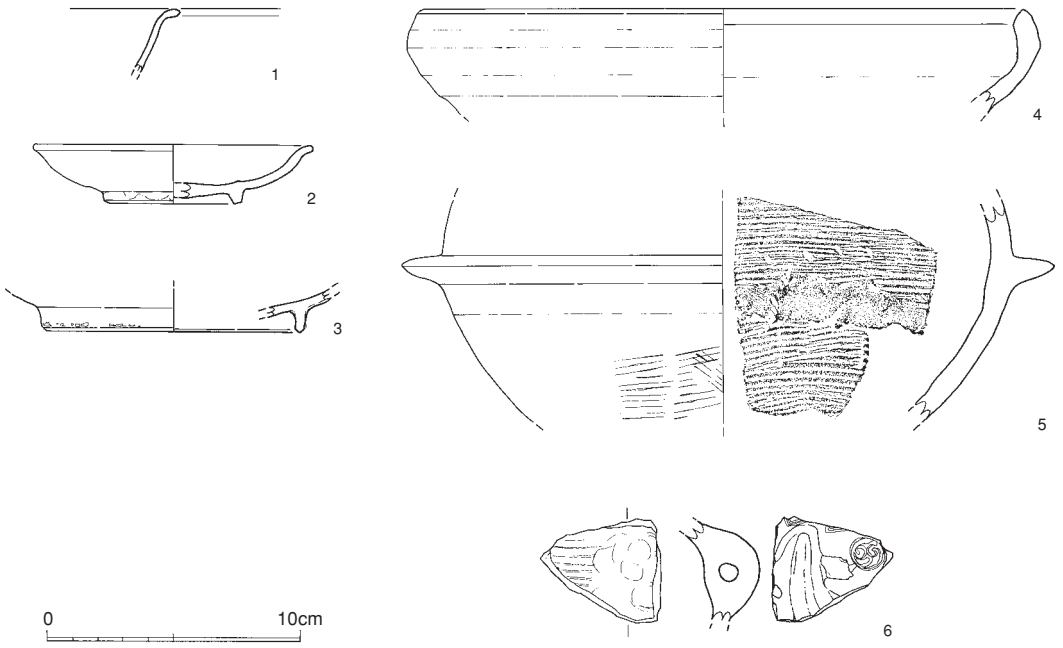


図12　SK013出土遺物1（1/3）

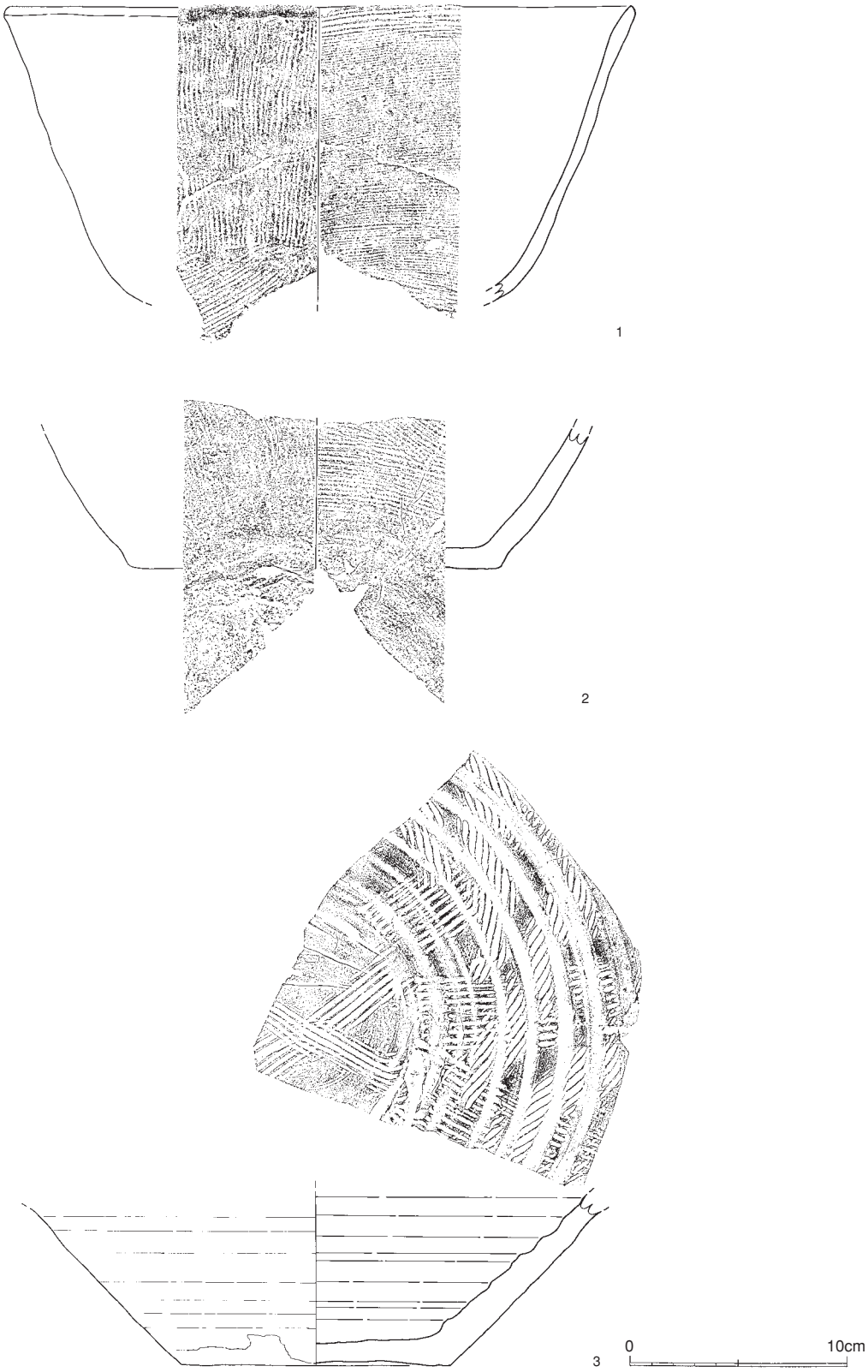


図13　SK013出土遺物2（1/3）

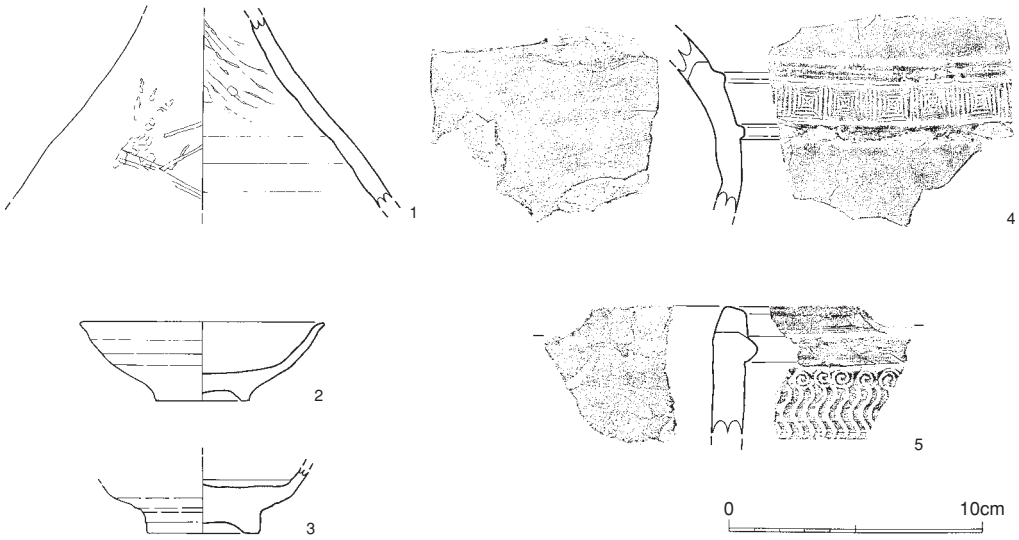


図14　SE038出土遺物（1/3）

SE038（図6）

調査区西側で1/2のみ検出。平面は径5m程の円形を呈する。完掘はしていない。

出土遺物（図14）

1～3は朝鮮王朝陶磁。1は壷、2・3は椀である。4・5は火鉢。4は体部片で、丸みを有し、2条の突帯間にスタンプ文を有する。

2. 第2段階の遺構・遺物

第2段階は主に調査区の南東側に展開する溝群が存続した時期にあたる。第3面調査時に確認した溝は合計5本あり（図15）、SD073～077までの番号を付している。土層をみれば（図4・16）、これら溝の幅は4m以上にも及んでいたことがわかる。第3面で確認した溝は最下部のものであり、幅1m前後、深さも数十cmに過ぎない。従って溝同士の前後関係、つまり切り合いも第3面調査時の所見からはSD075よりSD074が後出すること以外、判然としない。よって、土層図の検討により、溝群の形成過程について考えることにする。

図4・16をみれば、溝の掘削順序は、SD076→075→074・073→077の順であることが分かる。SD073を除けば、他の溝は西から東へと順に変遷していったといえるだろう。また、第2・3面調査時、溝に沿う形で杭が列状に並んで検出できたが、その配置をみれば、これら杭はSD074・075に伴うものであるといえるだろう。再び土層をみれば（図16）、SD074・075は底面近くで、更に一段深い掘り込みを有していることが分かる。

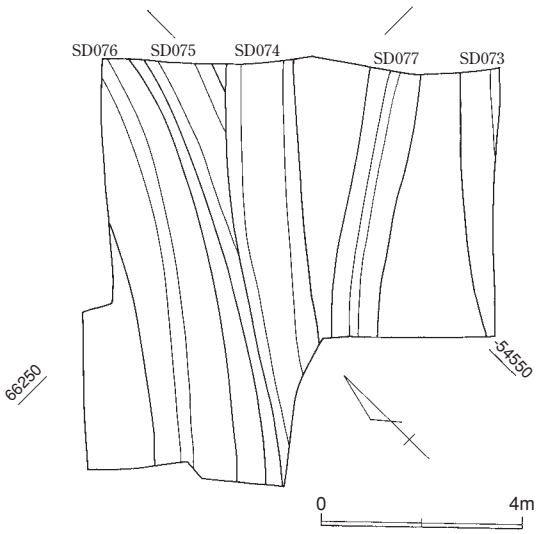


図15　各SD（1/150）

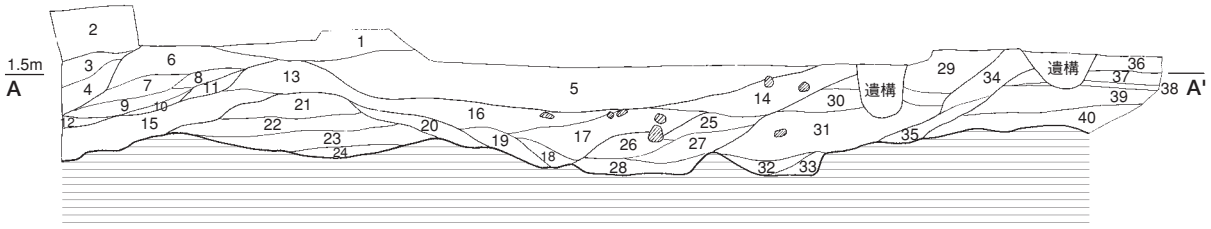


図16　SD土層（1/60）

1 暗茶褐（赤みを帯び、均一） 2 暗褐色 3 茶褐色 4 暗褐色 5 暗褐色 6 黒褐色（6～12砂多く含む） 7 黄褐色砂 8 暗褐色 9 黄褐色砂 10 黄褐色砂
11 暗褐色砂 12 灰褐色砂 13 黄褐色砂（黄砂ー白砂互層状に堆積） 14 灰褐色砂（白味帯びる。均一） 15 黒褐色（シルト質） 16 黒褐色（砂混じる）
17 黒褐色（シルト質で、礫多い） 18 暗黄褐色（黄砂混じる） 19 黒褐色（シルト質だが、砂も混じる） 20 灰褐色
21 暗黄褐色（21～24いずれも砂多く含み、互層状に堆積） 22 灰褐色 23 灰褐色 24黒褐色 25黒褐色（粘性低い） 26 暗黄褐色（黄砂混じる） 27 暗黄褐色
28 黒褐色（白砂混じる） 29 灰褐色（29～33砂多く含む） 30 灰褐色 31 暗褐色 32 暗褐色 33 灰褐色 34 灰褐色砂 35 暗灰褐色（鉄分沈着）
36 暗褐色（36～40砂質） 37 暗茶褐色 38 黒褐色 39 灰褐色 40 暗黄褐色

かつて、筆者は今次調査地点の近くで行なった、第150次調査における溝（SD050）調査の際、①底面近くで垂直に近い急な掘り込みがなされていること、②掘り込み部分の壁際には黒色シルト質土が検出されること、③底面壁際では小ピットが並んで検出されること、から底面近くの掘り込み部分には板等の有機質で土止めがなされていたと考えた。この事例に照らし合わせてみれば、今次調査で確認された杭列は、SD074・075における土止めの役割を担っていたものといえるだろう。

また、図16における5・14層などのように、溝には埋没後の再堆積を思わせるラインもみることができる。実際に機能していたかは別の問題として、この場所における「溝」状の落ち込みは、かなりの期間（第3段階に至るまで）存続したのかもしれない。以下では各溝の出土遺物について述べる。

SD074～077出土遺物（図17～19）

第1・2面調査時、各溝の具体的な切り合いが分からず、SD074～077を1つの大溝として捉えていたため、各溝上層の遺物を一括して取り上げてしまっている。その際の出土遺物を図17～19に示した。図17－1～12は陶磁器である。1・9・11は白磁椀である。口縁部付近がわずかに段をなす。9・11は底部片。9は内面にヘラ描および櫛目による文様を描き、細く高い高台部を有する。11は内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。いずれも椀Ⅷ類に属する。2～7・10・12は青磁椀である。2・3・4はいずれも外面に鎬蓮弁文を施す。竜泉窯系青磁で椀Ⅱ類に属する。5～7・12は底部片で、高台が低く底部は厚い。5～7はヘラ描による文様を描く。竜泉窯系青磁で椀Ⅰ類に属する。10は底部片で、外面に荒い縦方向の櫛目文を施す。また内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。同安窯系青磁で、椀Ⅲ類に属する。13～22は土師器杯、8・23～25は土師器皿である。いずれも底部は糸切りによる。8は内面に炭化した有機質の痕跡が残る。

図18－1・2は捏鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部はわずかに肥厚する。1は口径30.0cm、2は口径28.6cmを測る。3・4は擂鉢である。3は口縁部がわずかに肥厚し、4は口縁端部が内側へ短く屈曲している。すり目は3が4本単位、4が5本単位。5は火鉢口縁部片。口縁部はわずかに内湾し、端部付近の外面には花弁状のスタンプを施す。

図19には出土木製品を示した。1は皿であろうか。内外面には一部、黒漆の痕跡が残る。2・3は箸。先端は細く仕上げられている。2は残存長20.8cm、3は21.4cmをそれぞれ測る。

以上のSD074～077における出土遺物は、①輸入陶磁器に代表される12世紀後半～13世紀前半と②16世紀以降に二分することができるだろう。

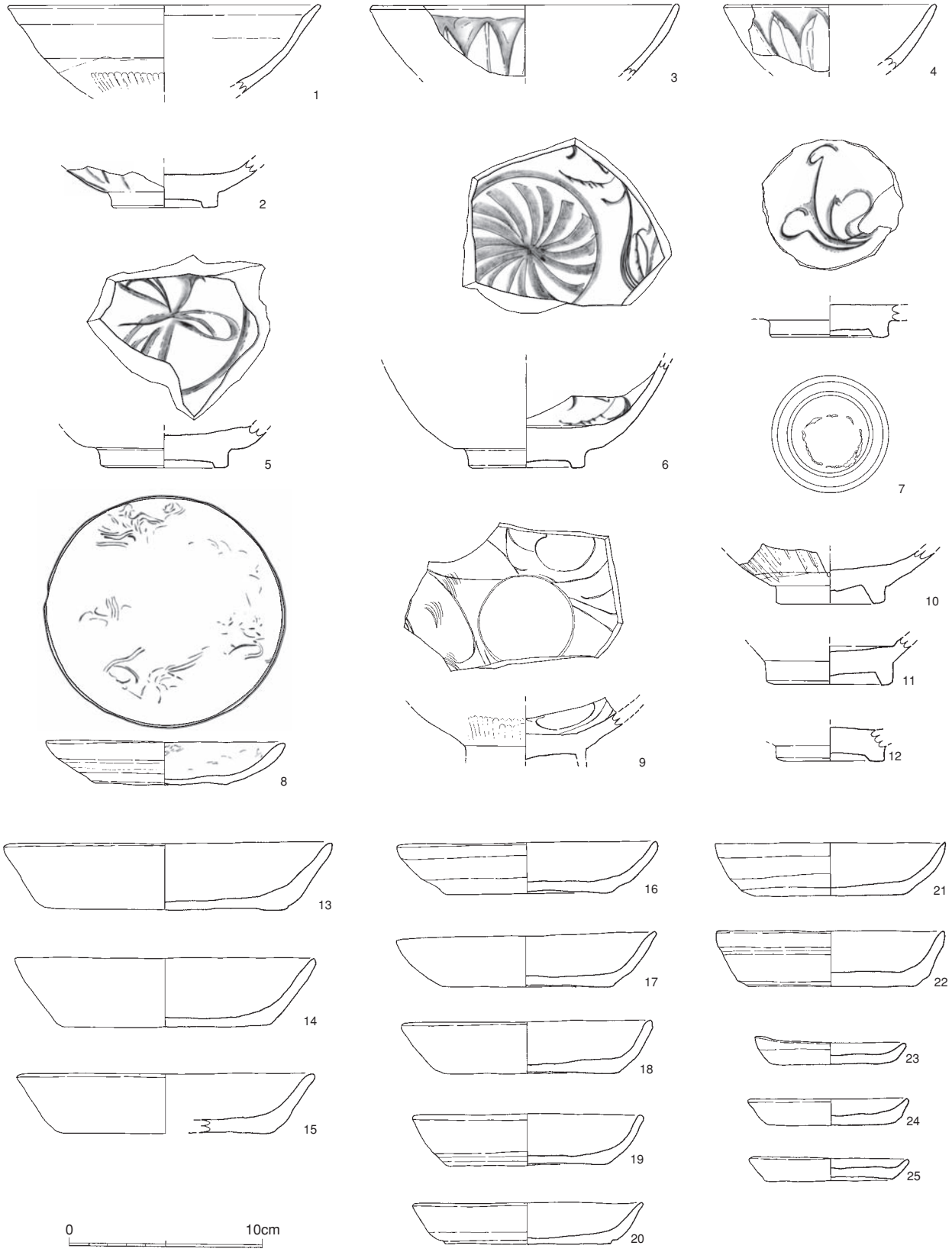


図17　SD出土遺物1（1/3）

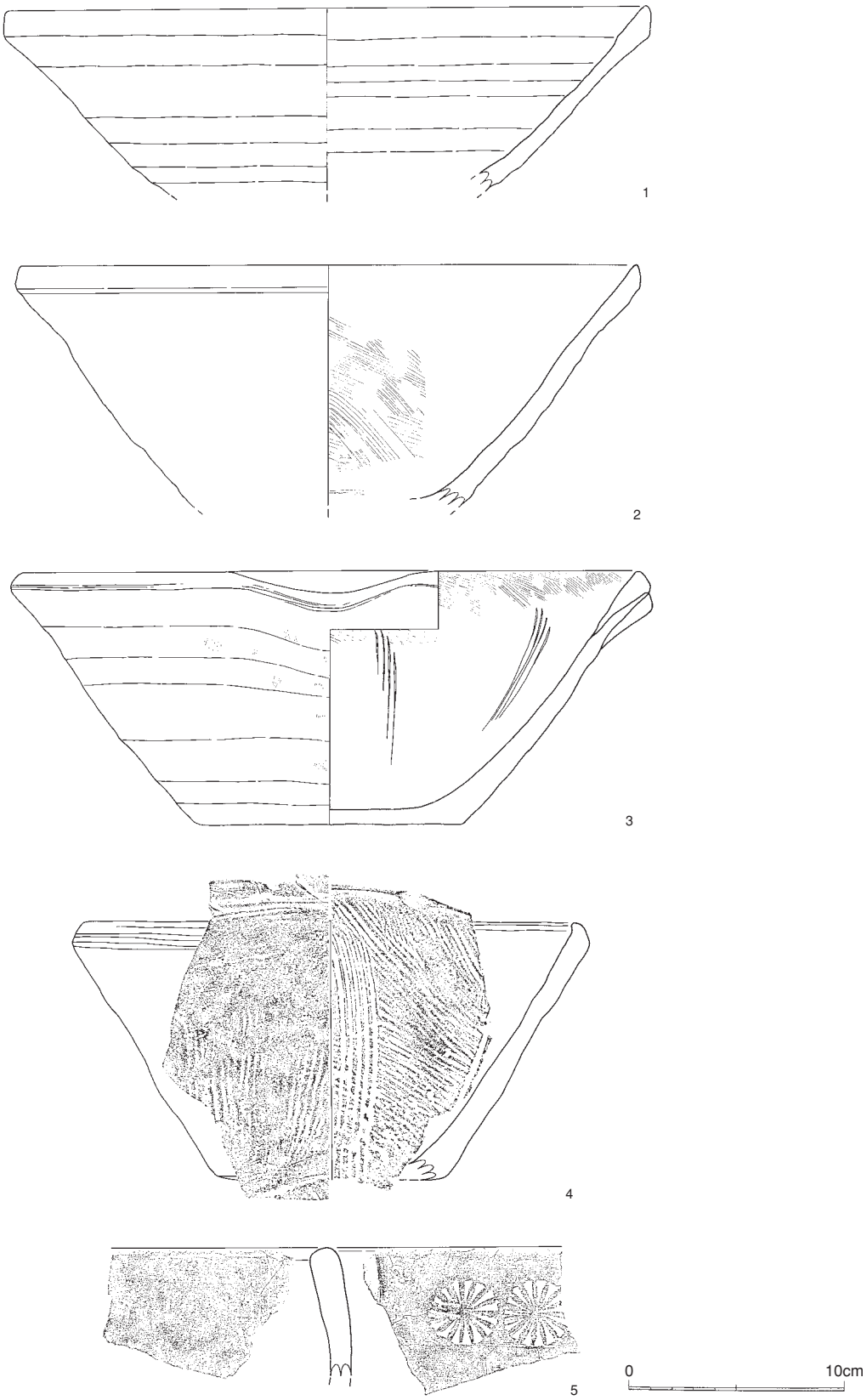


図18　SD出土遺物2（1/3）

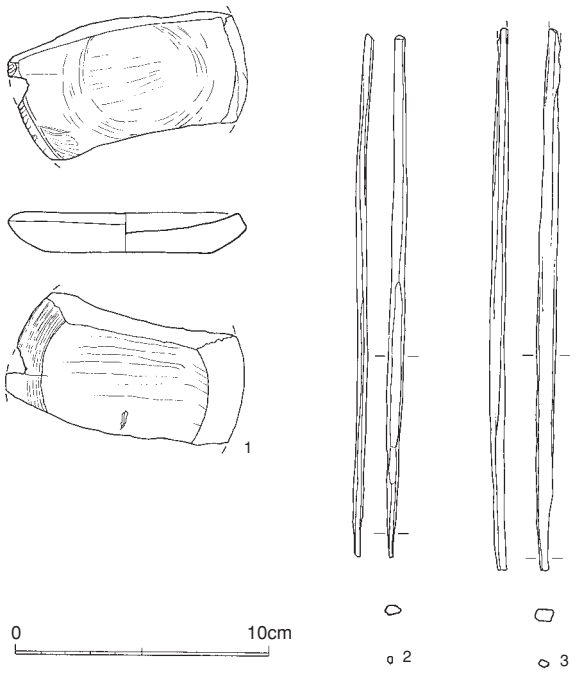


図19　SD出土遺物3（1/3）

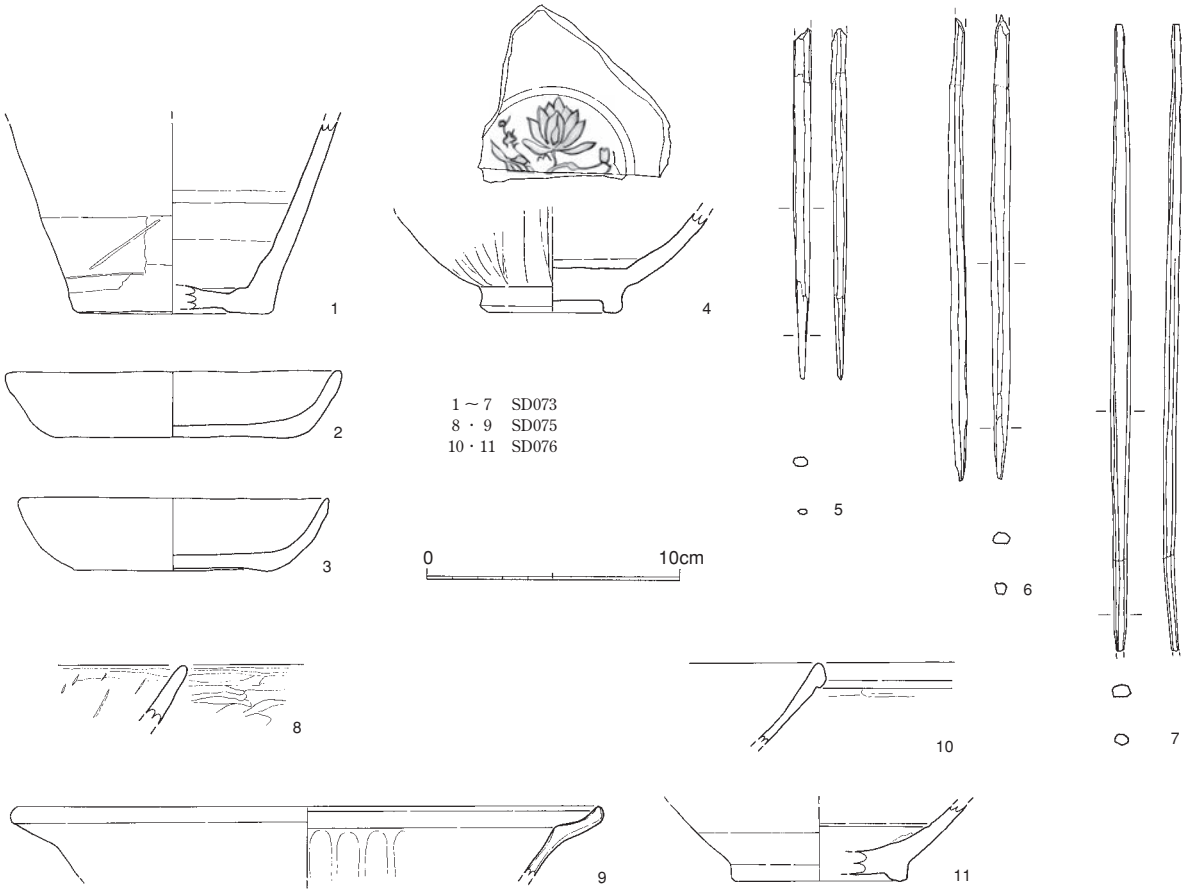


図20　SD073・075・076出土遺物（1/3）

SD073出土遺物（図20）

1～7はSD073出土遺物である。1・4は陶磁器である。1は壷等の底部片。4は椀低部片。外器面には鎬蓮弁文を施し、内面見込み部分には蓮華文の印刻を有する。龍泉窯系青磁で、椀Ⅱ類に属する。2・3は土師器杯。いずれも底面は糸切りによる。2は口径13.2cm、3は口径（復元）12.2cmをそれぞれ測る。5～7は木製品。いずれも箸で、先端は細く仕上げられている。5は残存長13.8cm、6は18.4cm、7は24.6cmをそれぞれ測る。

SD075出土遺物（図20）

8・9はSD075出土遺物である。8は瓦器椀口縁部片で、内外面にヘラミガキを施す。9は竜泉窯系青磁盤の口縁部片。口縁部は屈曲して、外側へ水平に張り出し、その端部は上方へ折り曲げる。内面には縦方向に凹面の削りを施し、花弁形をなしている。

SD076出土遺物（図20）

10・11はSD076出土遺物である。10は白磁椀口縁部片。口縁部は玉縁をなす。椀Ⅳ類に属する。11は白磁椀底部片。高台は低い。椀Ⅳ類に属する。

SK100（SD077）出土遺物（図21）

SK100は第3面調査時に検出した楕円形を呈する土坑である。この箇所はちょうどSD077の流路上にあたり、位置といい、大きさといい、これは土坑であるというよりむしろSD077の一部であると考えたほうがよいものである。

1は須恵器杯蓋である。口径（復元）9.8cmを測る。2・3は陶磁器。2は壷等の底部片。3は同安窯系青磁椀底部片。外面に櫛目文、内面にはヘラ描文とジグザグの点描文をそれぞれ施す。

各溝出土遺物の時期について

以上、第2面における各溝の出土遺物についてみてきた。第3面調査時にしか押さえることができなかったため、確実に各溝に伴う遺物はごく限られている。しかし、遺物の所属時期の下限はおおむね12世紀後半～13世紀前半に位置付けることができるだろう。これはSD074～077出土の一括遺物をみた際の①時期とも合致している。ここでは溝の存続時期を12世紀後半～13世紀前半の中で捉えておきたい。

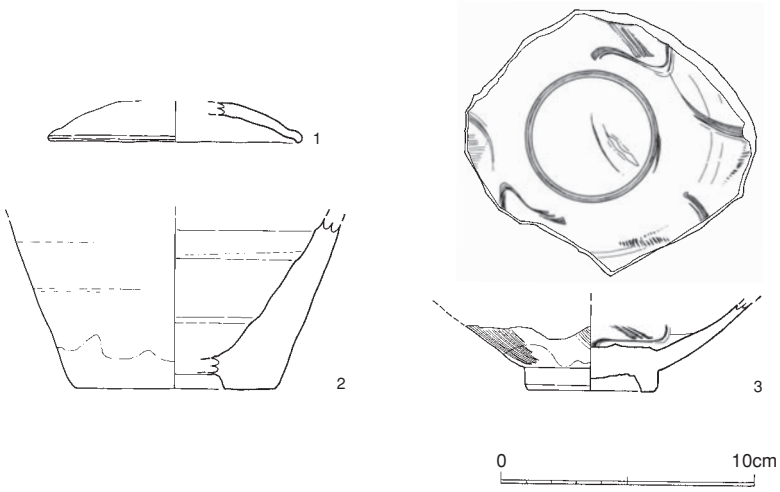


図21　SK100出土遺物（1/3）

3. 第1段階の遺構・遺物

第1段階は溝群の形成以前に位置づけることのできる遺構が存在した時期である（図6）。調査区の多くは溝群掘削の際に破壊されており、調査区の西側でわずかに残っているに過ぎない。遺構の種類としては土坑やピットがあり、大形の遺構は少ないが、それでもかなりの密度を有している。

これら遺構は標高1.5m前後の褐色砂質土上に営まれており、第2面調査時に検出されている。削平のためか、遺構の残りは決して良いものではなく、従って出土遺物もごく限られている。ここではこの段階における特徴的な遺構（SK043・063）について、述べていくことにしたい。

SK047（図22）

調査区中央やや北よりで検出した遺構で、平面は径1.6mの円形を呈している。深さは1m程で壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は小さい。出土遺物は限られているが、おおむね12世紀後半に位置付けることができるだろう。

出土遺物

1は同安窯系青磁椀の底部片である。内外面に櫛目文をそれぞれ施している。2は土錘。

SK063（図23）

調査区の西側で検出したもので、平面は1.1×0.6mの隅丸長方形を呈する。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦に仕上げられている。深さは0.4mを測る。この土坑からは、多くの土師杯・皿が出土している。土師器以外の遺物、例えば陶磁器等は極端に少なく、図化に堪える資料は認められなかった。土師杯・皿は完形もしくは完形に復元できるものが多く、土坑内の各層から出土している。杯、皿という器種の違いは、出土層位に反映されるものではなく、いずれも偏りなく上下層にわたって認められる。また、土坑床面上から出土した個体もあり（図23－1・4）、これらはいずれも杯である。

出土遺物

1～6は土師器杯である。いずれも底面は糸切りにより、形態にさほど大きな個体差は無い。7～21は土師皿。いずれも底面は糸切り。

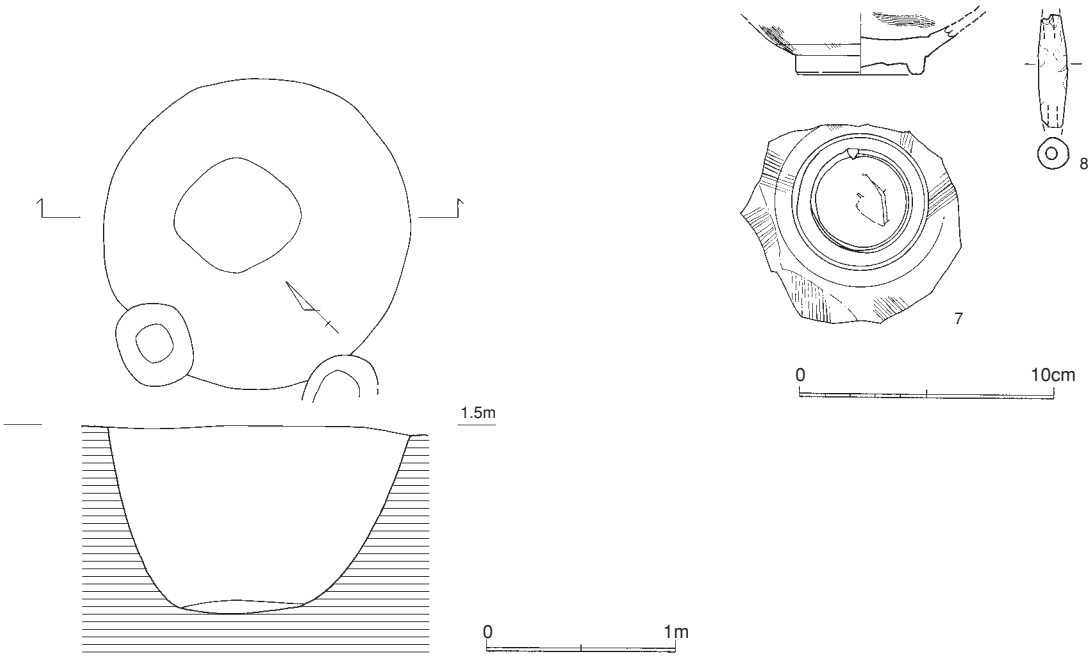
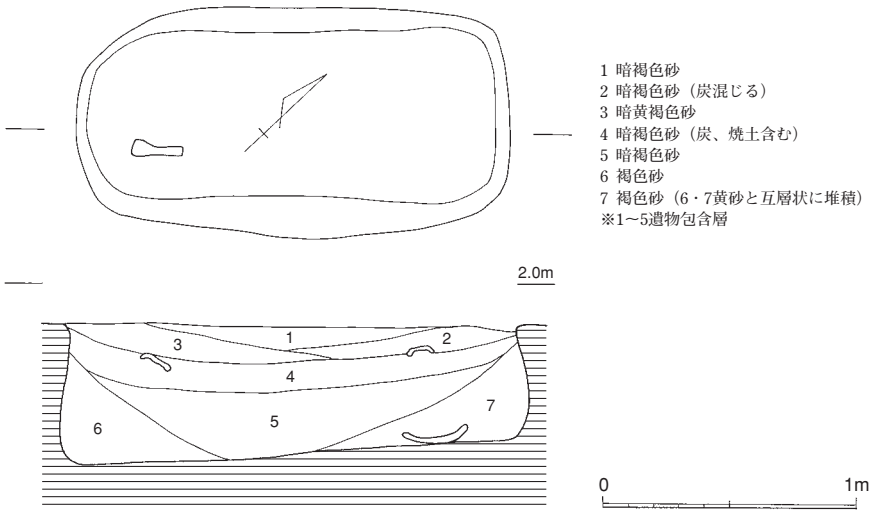


図22　SK047（1/40、1/3）



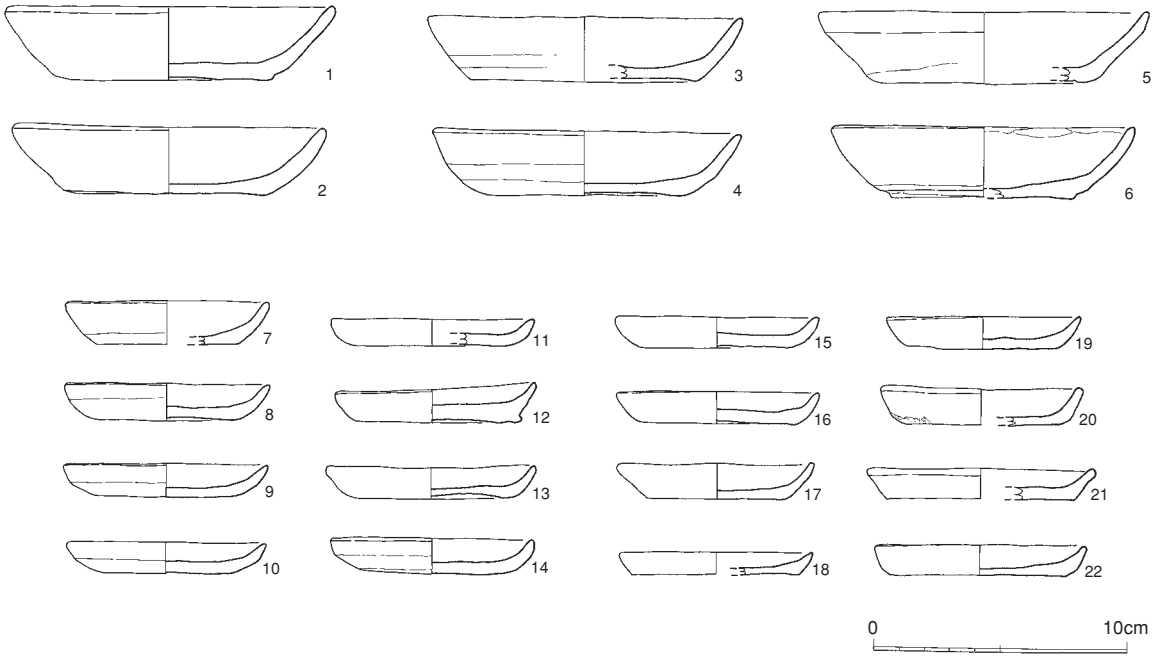


図23　SK063出土遺物（1/30、1/3）

第１期検出面（第２面）出土遺物（図24）

第１期の遺構を検出する際にも、遺物がいくつか出土している。以下にその所見を述べる。

１は青磁椀底部片である。高台は低く、内面の削り込みは少ない。底部は厚く、内面にはヘラ描文を施している。竜泉窯系青磁で、椀Ⅰ類に位置付けることができる。２は青磁椀底部片である。外面に櫛目文、内面にはヘラ描文とジグザグの点描文をそれぞれ施す。同安窯系青磁であり、椀Ⅰ類に属する。３は白磁椀底部片である。高台は低い。高台部の周辺を綺麗に打ち欠いている。瓦玉。４は白磁椀底部片である。細い高台を有し、内面見込み部分は釉を輪状に掻き取っている。椀Ⅷ類に相当する。５は青磁椀底部片である。内面見込み部分が段をなしている。同安窯系青磁。６は壷底部片。底径（復元）11.0cmを測る。７は土師器皿である。口径12.8cmを測る。底面は糸切りによる。

以上、遺物の概要をみてきたが、いずれの土器も12世紀後半の範疇で捉えることができるものといえるだろう。第１期に属する各遺構と時期的な矛盾は無い。

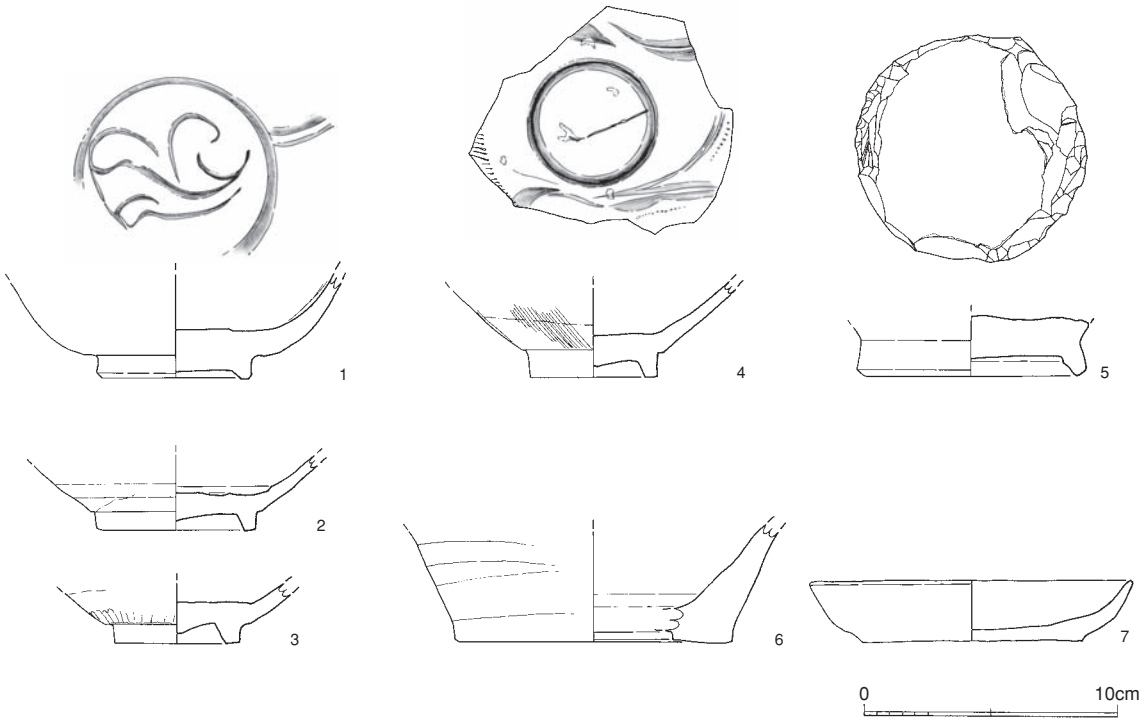


図24　第３面出土遺物（1/3）

Ⅳ．まとめ

ここでは今次調査の成果について、その所見をまとめることにする。

溝群について

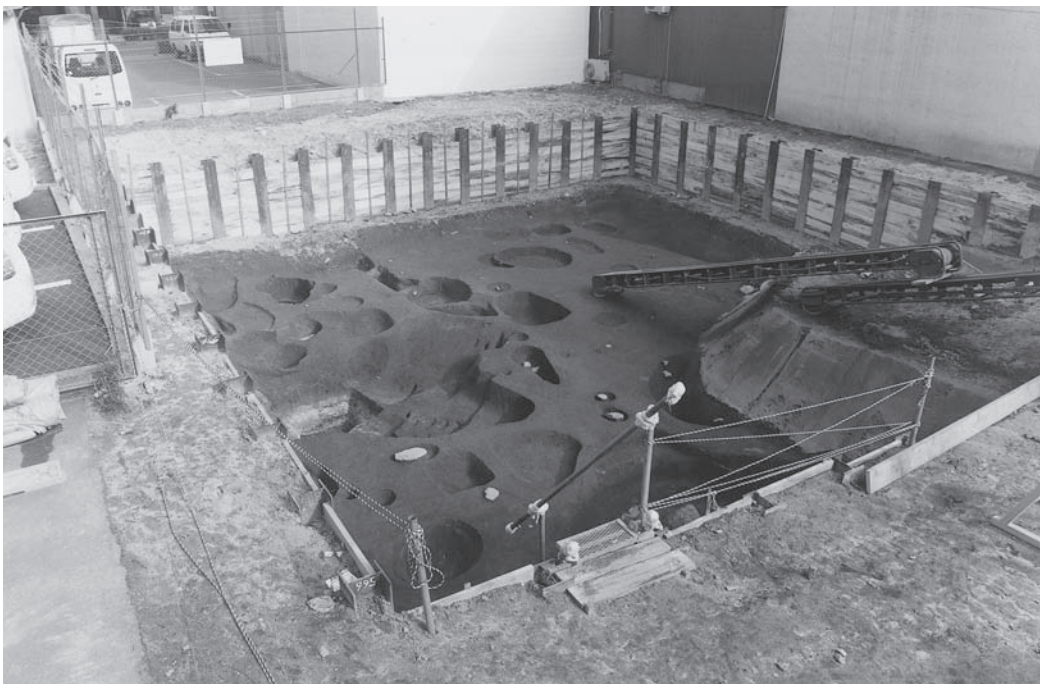
調査区の半ば以上を占める溝群は、今次調査の中心的位置を占める遺構である。幅４m以上と推定される大形の溝が５条、互いに切り合いながらも営まれている。溝は大きく西から東へと変遷しており、最も古いSD076は12世紀後半にまで遡る可能性もあるが、第１段階における遺構の時期も考え合わせると、各溝は13世紀前半段階に相次いで営まれたと考えるほうが自然かもしれない。冒頭に述べたように、近隣で行なわれた、第100次・第150次調査においても同様の大形溝が検出されている。特に第100次調査で検出された溝（001号遺構）は、位置関係をみれば今次調査におけるSD073と同一のものである可能性が高い。また、SD074・075に伴う杭列のような、溝底面近くに残る土留めの跡は、第150次調査時の大溝（SD50）においても確認されており、これら溝の関連が注目される。第100・150・168次の各調査によって、中呉服町周辺には12世紀後半～13世紀前半において、複数の大溝が営まれていることが明らかとなった。今後はこれら溝の性格究明が課題となるだろう。

これら溝は後、一旦廃絶する。土層を観察すればSD074・075の上部には再掘削も想定できる溝状の掘りこみがあり（図16－５・14層など）、各SD上層の掘り下げ中に出土した16世紀頃の遺物はこの掘り込みに伴うものだろう。

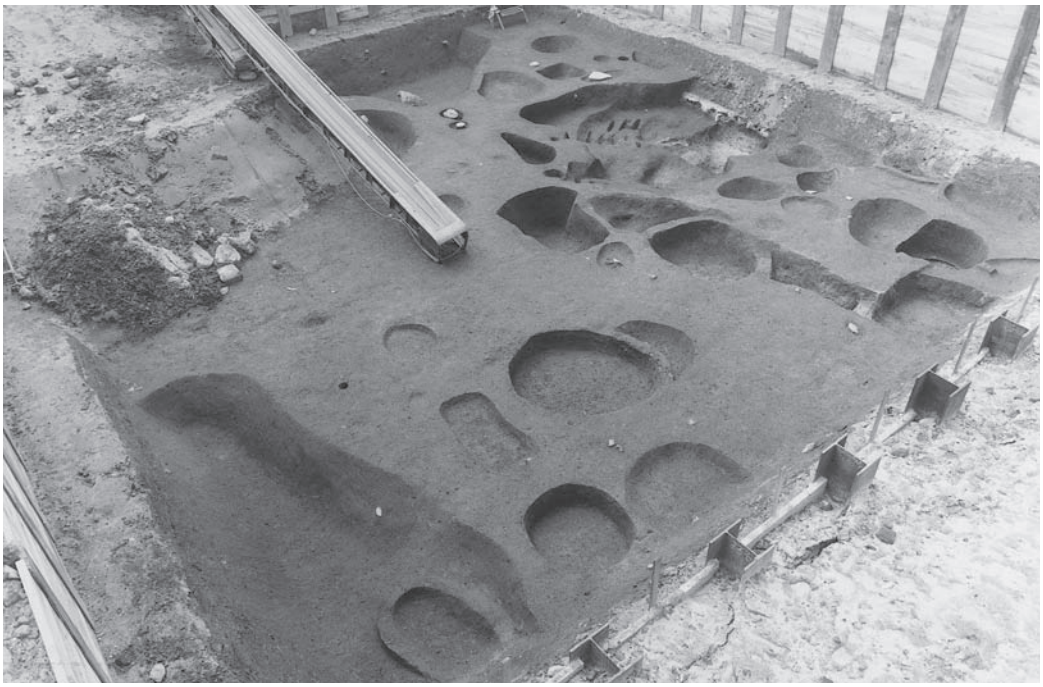
遺構の変遷

文中では今次調査における遺構の変遷について、次の３段階に分けた。第１段階は土坑、ピットがあるもので、時期は12世紀後半である。第２段階は多くの大溝が存在した時期で、13世紀前半を中心とする。溝廃絶後は、一旦の中断の後、16世紀になって再び遺構が営まれ始める（第３段階）。

第1面（南西から）

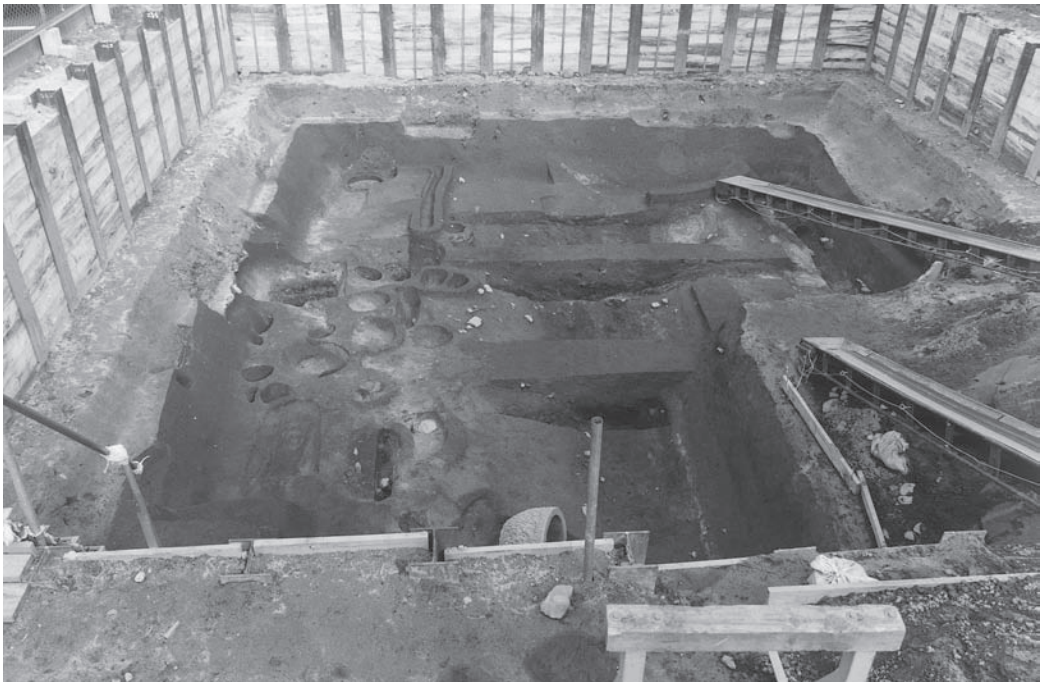


第1面（西から）

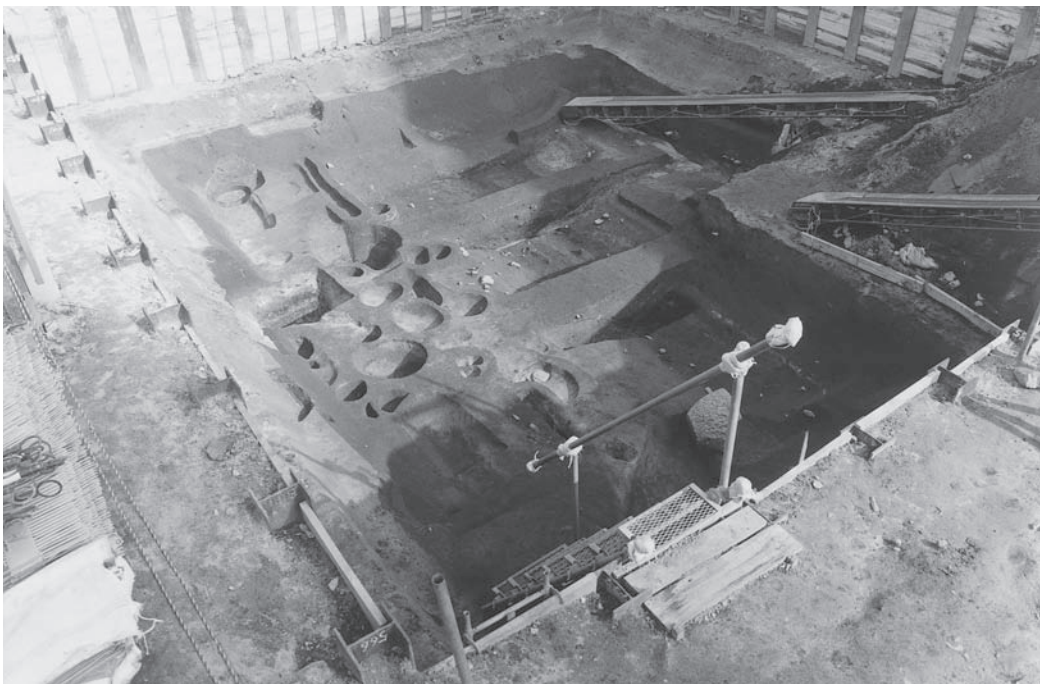


第1面（東から）

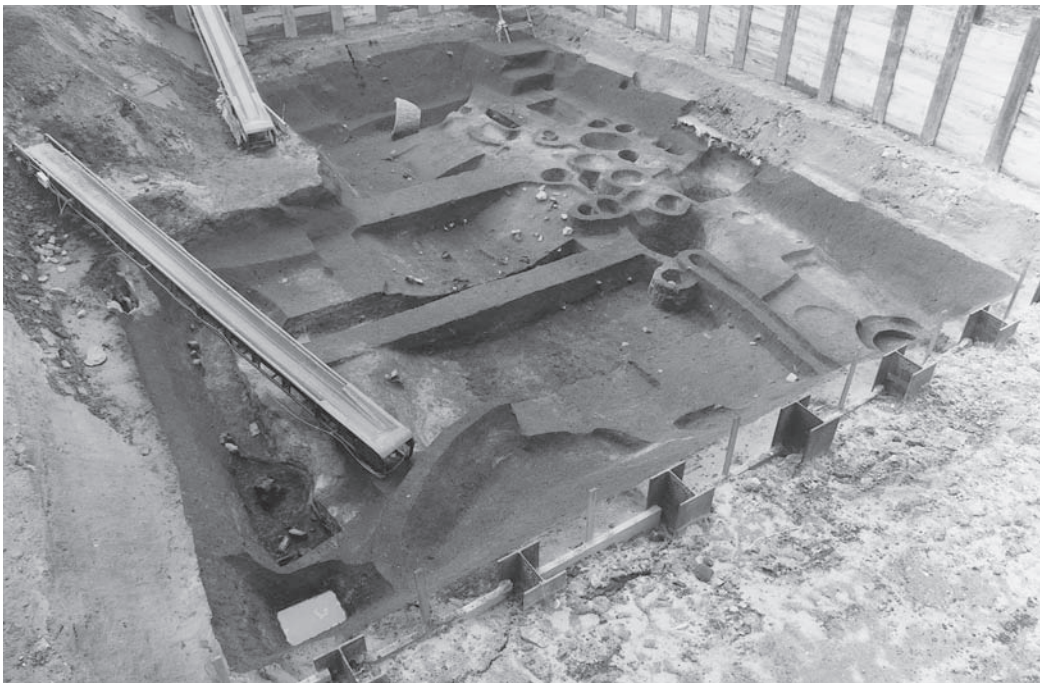
図版2



第2面（南西から）

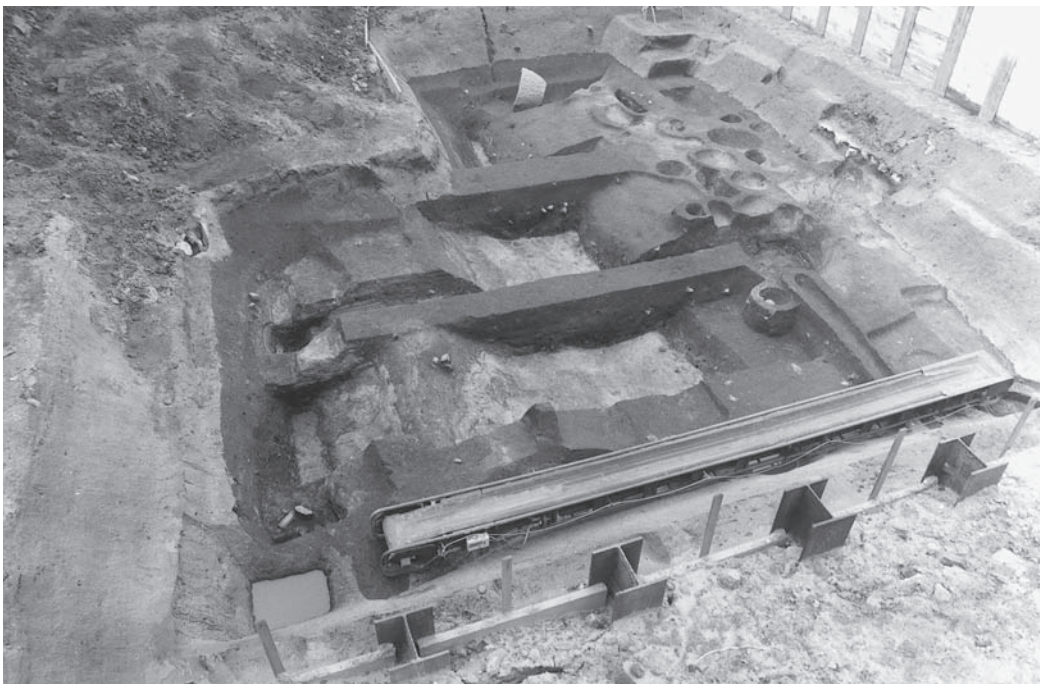


第2面（西から）



第2面（東から）

SD（南西から）



SD（西から）

SK047（西から）

図版4

第3面（南西から）

SK063土層（南東から）

SK063（南西から）

報告書抄録

ふりがな	はかた
書名	博多125
副書名	博多遺跡群　第168次調査
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第995集
編著者名	藏冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	平成20年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
博多遺跡群（はかた）	福岡県福岡市（ふくおかけんふくおかし） 博多区中呉服町（はかたくなかごふくまち）126	4013	0121	33° 35′ 58″	130° 24′ 38″	2006.12.01 ～ 2007.01.23	189	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群（はかた）	集落	中・近世	溝・井戸 土坑	国産陶磁器 輸入陶磁器 瓦質土器 瓦	

要旨

調査区の半ば以上を占める溝群は、今次調査の中心的位置を占める遺構である。幅4m以上と推定される大形の溝が5条、互いに切り合いながらも営まれている。溝は大きく西から東へと変遷しており、最も古いSD076は12世紀後半にまで遡る可能性もあるが、第1段階における遺構の時期も考え合わせると、各溝は13世紀前半段階に相次いで営まれたと考えるほうが自然かもしれない。近隣で行われた、第100次・第150次調査においても同様の大形溝が検出されている。第100・150・168次の各調査によって、中呉服町周辺には12世紀後半～13世紀前半において、複数の大溝が営まれていることが明らかとなった。今後はこれら溝の性格究明が課題となるだろう。

博多125

― 博多遺跡群　第168次調査 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第995集

2008（平成20年）年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10－5

遺跡名	遺跡略号	調査番号
博多遺跡群第168次	HKT－168	０６５６